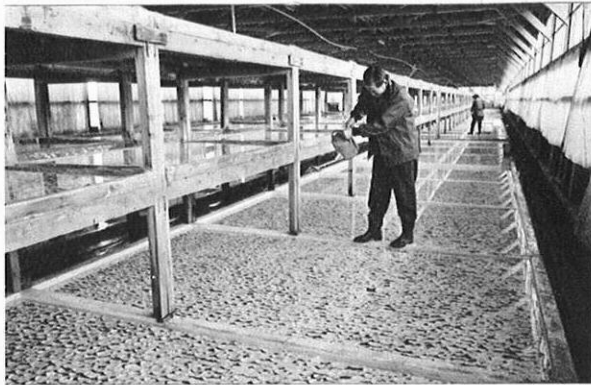


のり

鮑託郡天明村海路口



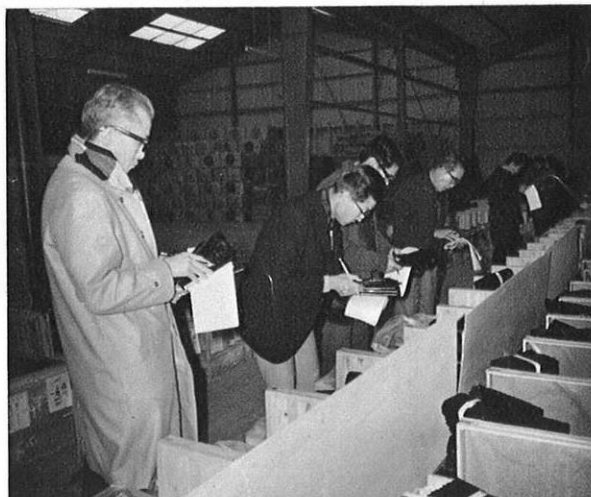
のりの採取風景



上・のりの種苗培養所。カキガラの上へのりの胞子をまいて……



上・自動のりすき機。この機械のおかげで労力は軽減されている。



上・のり共販所での入札風景

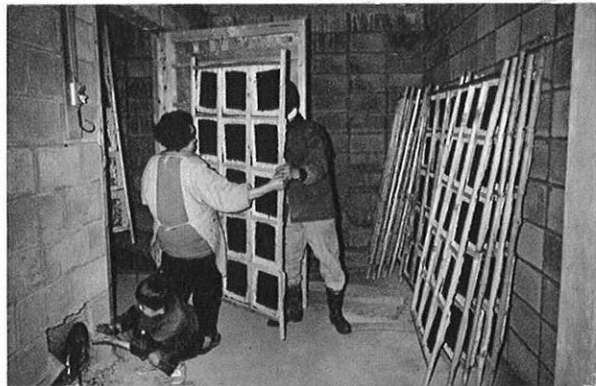
肌をさすような寒風をついて、海苔摘採船が一齐に海へ出てゆく。

11月から3月までの最盛期には、部落全体が戦場さながらの活気を呈する。

海路口漁協では、30年から32年にかけて、全国でも初めての人工種苗培養の実用化に成功。この結果種苗の購入価格が従来の3倍まで高くなり、統一された種付け技術で種苗も安定し、これが生産の安定にもつながった。さらに、35年には火力回転乾燥機を、39年には自動海苔すき機を導入し、また昨年から海苔摘採の機械化が進み現在ではともに80%の普及を見ている。

これら機械化によって、労力は激減され特に天日乾燥時の長雨などによる被害も解消された。

また、今年から、気象の急変で、あかぐされ病などによる不漁時の対策として、予備の種網を冷凍保存しておくなど、新しい試みが行なわれている。



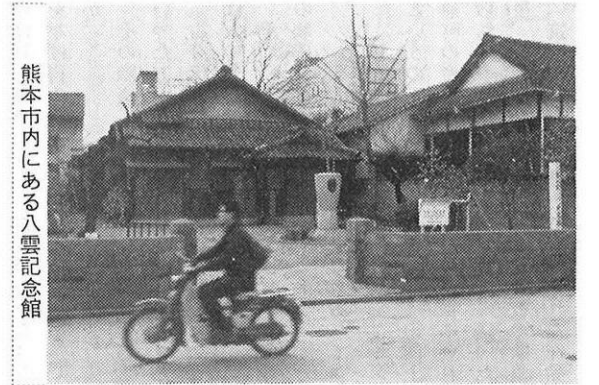
上・火力回転乾燥機。従来の天日式よりうんと早く、清潔だという。



上・漁協ではのりの品質検査を厳重に行っている。

蘆花は蘇峯の弟、終生新聞記者を以て任じた蘇峯に対して、蘆花は小説家として立ち、明治期のベストセラーNO1であった「不如帰」を始め、「思い出の記」「黒潮」「寄生木」「黒い眼と茶色の眼」「富士」等々の小説を書き、「自然と人生」に始まって「日本から日本へ」に到る多数の随筆や紀行を著した。中でも「思い出の記」の如きは蘆花の青年期をモデルとしたもので熊本の匂いが全巻にあふれている。

徳永直は熊本市近郊の生れ、印刷工その他の労働に青年期を送って社会主義に傾き、後年の作品は皆その思想的背景から生れた。印刷工場のストライキを扱った「太陽のない街」はその代表作で、当時のいわゆるプロレタリア文学の古典とされた。



熊本市内にある八雲記念館

木下順二は現在活躍中の作家、初め戯曲家として立ち、名作「夕鶴」は舞台にのせられること数百回、同じく「風浪」は明治初年の熊本の青春を描くもので熊本人には特に感銘が深い。球磨生れだが晩年を熊本に送った。「それからの武蔵」の小山勝清は昨年物故したが、武蔵の遺跡に富む熊本やその近郊を思うと「宮本武蔵」の吉川英治とともに記憶されるべきである。

「森の都」の名つけ親といわれる夏目漱石は、足かけ五年も熊本にいただけ、その作品には熊本から得た題材や影響が格段に多い。

眼を転じて熊本に取材した小説作品とすると古典的な名作も少くない。先ず挙げられるのは森鷗外、彼は小倉師団の軍医部長当時熊本を訪れただけに過ぎないというが、その作品の中、特に歴史ものに多くのモチーフを得ている。「興津彌五右衛門の死」「阿部一族」「都甲太兵衛」「津下四郎左衛門」等がそれで、中でも「阿部一族」は代表的なものである。

八雲が松江中学から五高の教師として着任したのは、漱石より五年ほど早い明治二十四年（一八九一）だが、最初の宿は前記手取本丁の赤星晋作邸であった。筆者は晋作の副子典太（八雲の教え子で元熊本その他の知事）翁の許に親しく出入りしたので八雲が特に造らせた神棚のことや、隻眼近視の彼が煙管の火で畳に焼きこげ作った話、同僚秋月胤水翁との親交などについて屢々聞かされた。

八雲の作品で大衆的に知られたものは少い。先年映画化されて外国にまで声価を博した「怪談」はその意味で異例のものである。彼は立田山泰勝寺等を常に逍遙したといわれ後年節子未亡人が八雲の好んだものとして挙げている「西、夕焼、夏、海、游泳、芭蕉、杉、淋しい墓地、怪談、浦島蓬萊」などを見ても、彼の東洋趣味や人となりが見え、それにしても熊本や熊本人はあまり好きでなかったらしいことが、彼の手紙などに散見するのはこれも皮肉な話である。